

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

コードギアスーシャーリーのギアス完結編ー

【作者名】

レイガース

【あらすじ】

- ・シャーリーが生き返ったら
- ・シャーリーがギアスを使えたら
- ・シャーリーが歴史を変える存在だったら
- ・シャーリーがナイトメアを持って、戦ったら

など、前作の流れを受け継ぐ形で、完結編を作っていこうと思います！

所注意ーこれは原作と関係ありません！オリジナル要素も加えますが、それは物語に必須のためです！制作意図や制作会社とは一切関わりはありません！ 完結編から3000文字以上書いております。読み終わったら、感想と評価お願いします。

光のギアス魔女シャーリー

バベルタワーが破壊されるのを、シャーリーは無線で学園内で聞いていた。コーネリアに代わり、新総督となったカラレスが死んだことで、ルルーシュがゼロとしての記憶を取り戻したと確認する。

シャーリーは記憶改ざんされた生徒会メンバーや生徒たちを使って、ルルーシュをこの一年間、監視していた。D・2に蘇らせられなければ、ギアスとギアス無効果の力が無ければ、今頃は皇帝に記憶改ざんされてルルーシュを別の意味で監視する羽目になっていただろう。その記憶を持っているシャーリーにとっては、これから始まる戦いとシャーリーが亡くなった日が近づいていることを考えていた。

「シャーリー・フェネット、少し話がある」

シャーリーは、機情【通称】：機密情報局【と云われる組織に所属している、当時は純血派に所属していたヴィレッタ・ヌウに呼び出された。

「お前が皇帝陛下に逆らうような言葉を言うとは。よほど、あの男が好きなんだな」

ヴィレッタは地下の機密情報局の本部で、椅子に座ってから溜息を付いた。

シャーリーは仮面を外し、皇帝に自らルルーシュを監視させてくれと頼んだ。それは、ルルーシュを守るが故の行動であり、恋からする愛だけではなく、ルルーシュがナナリーを守るうとしたのと同じ行動であった。

シャルルは内心では驚いていたのだろう。スザクはナイトオブ

ラウンズの入団をルルーシュと引き換えに得たが、シャーリーはそれを望まず、エデンとしての自分でいいと言った。V・2はどこからか現れ、シャルルに承諾するよう話す場面もあった。

シャーリーの思惑では、皇帝ルルーシュとなる前に決着を付けたかった。ルルーシュを殺してはならず、皇族もシュナイゼルに殺させてはいけない。後者のほうは、第8皇女キャサリンの頼みであった。

「しかし、ユーフェミア皇女殿下が生きていたとは。皇帝陛下は虐殺皇女の失態の件で皇位継承権を剥奪なさって死亡扱いにしたから良かったものの、お前は何者なのだ、シャーリー・フェネット？」

シャーリーは微笑み、

「ヴィレッタ卿と同じ、特別にギアスが使えるだけの、ただの女ですよ」

とシャーリーは話すのだった。ヴィレッタはそれ以上追求はしなかった。この一年間でシャーリーの身体能力、頭脳解析は高くなってきていた。その理由はナイトメアになる際に植え付けられた、ナイトメアの知識だけでなく、あらゆる情報の全てのデータだった。シャーリーは元々水泳部に所属しており、身体能力の基礎を叩き込まれていた。そのせいか、合間にスザクの受けた兵士の訓練やナイトメア操縦技術がスザクを遥かに超える能力を身に付けた。

ルルーシュを凌ぐ頭脳解析の力は、植え付けられたあらゆる情報の全てのデータとそれを確認し復習するだけの容量でシャーリーを力付けた。

「お前がただの女だと？ 謙遜するな。この一年間見てきた私には分かる。特別だよ、シャーリーお前は。能力だけじゃない。女としても、私は誇りに思う。まるで…」

そう、まるで閃光のマリアンヌ王妃を見ているみたいだ。皇族でただ一人、幻のナイトメアであるガニメデを操った女。生きていたら、幻よりも伝説に近かっただろう。

「いや、気にするな。呼び出して済まなかったな。少し休みたい。監視を頼む」

シャーリーはヴィレッタの様子に気がかかったが、口口からの連絡を待たなければならぬ。シャーリーは教室に戻ろうとすると、口口と一緒にいるルルーシュを見かけた。教室に入ると、ゼロ復活の話で騒然としており、ルルーシュは何も興味ないかのように、机で寝ていた。

ヴィレッタがルルーシュを呼びに来たのは、それから数分後のこと。ヴィレッタの話では、連絡の取れない口口にルルーシュから連絡して帰るように言ったらしい。

ルルーシュには悪いが、自分もナナリーを忘れた素振りを見せつつ、監視を続けることにする。ルルーシュには分からないと思ったが、ミレイヤリヴァルは記憶改ざんされて、自分の料理スキルが上がっていることは知らない。生徒会の料理メンバーにはルルーシュと分担する程の腕前である。

そんな頃、中華連邦総領事館で黒の騎士団の残党処刑が中継される。記憶が正しければ、自分が頼まれていたヴィレッタの誕生日の贈り物でワインなどをルルーシュに頼むはずだった。シャーリーはルルーシュにその手伝いを頼みに行くと、すぐさまOKしてくれた。

ワインの店に行くと、自分もワインを選ぶ素振りをしつつ、周りを見回す。ルルーシュを監視する機密情報局の人数を把握する。ルルーシュも気付いているはずだ。ワインを買って、携帯などの店内に入る。ルルーシュの思惑に乗ってみよう。もうすぐ、偽のテロ事件が

起こる。

店内を出ると、次は服を選ぶ店へ入る。ルルーシュの思惑を少し潰すのは辛い、情報局の仲間にはギアスキャンセルを使わせもらおう。

テロ事件が起きると、辺りはパニックに陥る。ロロが現れ、ルルーシュの入っている着衣室を見る。シャーリーはそのパニックを利用して、ルルーシュのギアスにかかった男のギアスをキャンセルさせる。

翌日、シャーリーはエデンとなり、騎士団を率いて中華連邦総領事館の前に立つ。前方には精鋭部隊がいるが、意味はあまりない。

ギルフォードがゼロが来ないと分かると、処刑の合図をする。だが、ゼロと無頼の登場で場の空気が変わる。ゼロはギルフォードを挑発して、前持ってロロを手駒にしていたルルーシュは、ブラックリベリオンの時と同じく、フロアをパージ（崩させ）、ギルフォードの戦力やグラストンナイツを一網打尽にしようとする。エデンの騎士団は待機のまま動かなかったため、被害を受けずにゼロの思惑を少し崩していた。

ゼロがバベルタワー戦の時に使っていた戦力を使い、処刑されようとしていた残党一味を救い出す。エデンの騎士団の役目は、中華連邦の動きを見張ること。ブリタニアに背く行為とも取れるが、これも役目として申請していたので、代理総督でも手は出せない。

ールル。今は思惑に乗ってあげる。自分が優勢だと思っているなさいねー

それでも、ナナリーを救いに行くには反対だ。ナナリーが総督に任命されることは歴史に反することであり、本当の意味で救いたくば、自分の価値観を捨ててナナリーに意見を聞いてみればいい。

私は、ロロには絶対に殺されない。あの時は何も知らず、ロロを

傷付けるような発言をしてしまったために銃を奪われ殺された。もうその流れはない。自分もギアスを持ち、他人のギアスを解くギアスと他人のギアスの影響を受けない力を持っている。前のように天然だとは言わせない。自分のやってきた結果は、歴史のほんの一部を変えている。それだけでも、自分の運命を変えている出来事にも大きく関わっているのだ。

その頃、EUではスザクがランスロット・コンクエスターに乗り、シュナイゼルの指揮の下、EUの支配している領土を手に入れるため戦っていた。キャバルリー時にはなかった装備である一点集中型のブラスタ砲や大量のエネルギーを消費する代わりに全方位シールドを張れる特殊な装備もされていた。彼はもう、名誉ブリタニア人の最高位であり、ナイトオブブラウンスである。ナイトオブセブンの称号は、皇帝以外の指示を受けず、またナイトオブブラウンスであるため、他の高官たちや総督の指示も受けない。けれど、ナイトオブブラウンス内は最高位のナイトオブワンの指示に従わなければいけず、ナイトオブワンの指示は皇帝の指示として認識しないといけない。

スザク歓迎会とナナリー奪還計画

スザクは皇帝シャルルの命令によって、エリア11に配属になることになった。ゼロが復活し、カラレスが亡くなったことにより事前にナナリーより先に、ゼロがルルーシュであるか確かめなければいけないのである。

シャーリーはスザクに呼び出されて、政庁近くまで来ていた。

「久しぶりだね、シャーリー。仮面を外してもらえたら嬉しいよ」

シャーリーはエデンとしての自分を脱ぎ、仮面を外して下に置く。

「君に尋ねたい。僕より優れ、ルルーシュより賢い君は何者なんだい？」

ヴィレッタと同じようなことを尋ねられたシャーリーは、今度はエデンとしての自分を重ねて、こう言った。

「私は私よ、スザクくん。でも、あなたと違うところ、それはいつでもルルを助けたいと思っていること。だから、例えばあなたと敵対しようともルルを守るわ」

シャーリーの顔に嘘はない。シャーリーは恋や愛だけじゃルルーシュを守れないことを生き返って知った。ルルーシュを好きだった自分は口口に銃で撃たれ、その結果ルルーシュに辛い重荷を背負わせてしまった。ナナリーを守るために自分の身を犠牲にし、世界を一つにすることも背負って。

「アッシュフォードに復学する話は聞いたわ。ルルを監視するためにしよう？それは別にいいの。スザクくんの好きにしたらいいわ」

賛成とも否定とも取れない言葉。スザクはシャーリーの性格はこうだと思っているかもしれないが、シャーリーは少し変わった。もちろん、死を経験して、その記憶を持っていて、ルルーシュを守るため、エデンとなってナイトメアを乗り、ルルーシュの罪を少しでも軽くしようと頑張ってきたからである。

その頃、政府のナイトメア広間では、ナイトオブスリーのジノ・ヴァインベルグとグラストンナイツが戦闘を始めようとしていた。そこに、エデンの騎士団ナンバーツのゲイルが現れ、グラストンナイツのナイトメアを止め、自らジノのナイトメアと戦闘を開始した。ゲイルはエデンの騎士団が正式に本国で認められ、その中でもトップの数人に専用のナイトメアを持つよう取り図られた。ジノのナイトメア、トリスタンと戦っているゲイルのナイトメアはタナトス。死を司る神の名を持ったナイトメアだ。

さらに、戦闘が長いため駆け付けたナイトオブシックスのアーニヤ・アールストレイム・モルドレッドは、エデンの騎士団ナンバースリーであり、ジノの従姉妹であるロメイン・ヴァインベルグのナイトメア、パンドラによって止められ、仕方なく機体を止める。

「そこまでだ、ジノ。彼は同じくらい強い。それと、僕のナイトメアを持ってくるよう頼んだはずだけど…」

「ゲイルもそうよ！ナイトオブブラウنزの機体壊したら、何言われるか分からないでしょう？」

パンドラのハッチを開け、ロメインが手を振る。

「あー、エデンだ〜！久しぶり〜！」

ジノがスザクに飛びつくように、ロメインもシャーリーに飛びつく。ゲイルはアーニヤの携帯に写真を撮られたり、アーニヤの携帯の他の写真を見せて貰ったりして、なぜか仲良くなっている。ナイトオブラウンズ、エデンの騎士団の両メンバーの最強6人の騎士がここに集った。

ルルーシュは、影で機密情報局の監視体制に穴を空けつつ、黒の騎士団のカレンやC・C・に連絡を取っていた。無論、スザクが復学するなど思ってもいない。

シャーリーは設備が大きくなったナイトメア研究所に向き、D・D・がアローン後継機である新型ナイトメアに着手しているのを見る。C・C・のガウエインと共に海に沈められ、引き分けたからいいものの、肝心なナイトメアを破壊されC・C・に逃げられたので、かなり痛手だったらしい。

「来ていたのですか、シャーリー。貴女のナイトメアは大丈夫なのですか？」

「ナナリー総督就任までには間に合う予定です。護衛できないのは、少し寂しいですけど」

「皇女殿下とは親しいのだったね。ナナリー殿下が本国に戻られて、キャサリン殿下も喜んでいたよ」

「新しい餌が増えて良かった、とねー」

シャーリーはキャサリンの喜ぶ顔が浮かぶが、D・D・が内心で思っただけのことなど知る由もない。

「私は今はやることがあまりないので、学園のほうに専念します。時々様子見に来ますが、ゲイルとロメインの件はいいのですか？」

「彼らの要望だ。私が口を挟むことではないのね」

むう〜、と諦めのシャーリーに、D・Dはコーヒーを一口飲み、微笑むのだった。ルルーシュが学園の監視体制を穴だらけにしても遅い。自分にとって、学園などほんの一部の範囲内ではない。アーカーシャの剣など、自分の計画に比べたら容易い武器である。

「クロノースの盾。それさえ完成すれば、私の計画は進むのだから、貴女は貴女のしたいことをすればいいのです」

クロノースの盾。それは、時空を司る神を護る盾。アーカーシャの剣が神を滅ぼすのであれば、クロノースの盾は神を護る。皇帝やV・Vのやろつとしていることはお見通しなのだ。

そして、翌日の朝。

「本日付けを持ちまして、このアッシュフォード学園に復学することになりました、枢木スザクです」

「えー、あのナイトオブブラウンス様〜！」

「ゼロを捕まえた英雄」

ナイトオブブラウンスとなったスザクの人気は、ユーフェミアの騎士に選ばれてラウンズに入団してからうなぎ上りだった。

「久しぶりだな、スザク！」

「そうだね、ルルーシュ！」

ルルーシュとスザクの距離が近づく度、二人の中でブラックリベリオンまでの道のりを頭に思い浮かべる。それは真実の記憶であり、ルルーシュは皇帝にギアスをかけられ、忘れていくように装う。

「スザクくんが帰って来たんだって？」

「このアッシュフォード学園の理事長の孫娘で、生徒会長のミレイ・アッシュフォードは、ブラックリベリオンからスザクが学園に来なくなってから心配していた。そのため、

「会長、今は授業中ですよ！」

「何よ、ルルーシュと別にいいじゃない〜！」

と、理事長の孫娘の権限を利用したかのように、ドンドンとスザクに近寄っていく。

そして、スザクは生徒会のみんなから学園の事情を聞きながら、ルルーシュの行動を監視して確かめていた。

「どうでしたか、ご自分で確かめられて？」

「まだ分かりません。嘘で装っている場合も考えられますし、もう少し調べてみないと」

スザクは監視映像に映るルルーシュを見ながら、次の手を考えていた。ルルーシュの弱点を使えば、あるいは、と。

「今日は、それほど長い時間も話していませんし。以前の馴染みの友人や仲間も傍にいましたから。その後は他の生徒たちに囲まれたり

して」

「では、はっきりと判断はされてない？」

「いえ、演技は昔から得意でしたから。大勢の人達を欺いていた前科もあります」

ヴィレッタの表情が少し緊張を増す。

「記憶が戻っている可能性もある？」

「それも、今の段階では判断ないと思います。やはりもう少し調査が必要かと」

スザクは学園で行われる自分の歓迎会を使い、ルルーシュの意図を確かめるつもりでいた。その歓迎会が3日後に行われ、

「本当にやるんですか？」

「諦める、スザク。ここでは、会長の命令は絶対だ」

スザクは息を大きく吸い込み、

『ニャー…』

とマイクで歓迎会の合図をするのであった。

合図とともに始まった歓迎会は、ナイトオブブラウンスのジノとアーニヤも参加し、エデンの騎士団からもゲイルとロメインが参加した。

歓迎会は文化祭のように、ミレイが失敗した一年前の学園祭を取

り戻りたいような感じで始まった。催し物といえば、バンジージャンプ体験や乗馬体験、研究部の試作発表、揚げ物などの販売などがメインだった。

その揚げ物に夢中になっていたのは、ジノとアーニヤだった。

「アーニヤ、これ面白いな！」

「記録……」

アーニヤは携帯で写真をカシャリと撮り、自分のブログや記録に加えた。ジノは他の販売物や出し物を辺りを見ながら探していた。

シャーリーは参加しているゲイルとロメインを捜しに、校内を見回りながら、途中で揚げ物店から動いたジノとアーニヤを見かけるも、その後ろで走っているロメインを見つけ、シャーリーは風のように駆けて追いかける。

「ロメイン待ってよ〜」

「ん?」

ロメインは口に加えたサンドイッチを飲み込み、

「シャーリーどうしたの?そんなに慌てて?」

「ハアハア〜。ロメイン、ゲイルと一緒にじゃなかったの?」

ロメインは首を横に振り、

「あいつなら確か、私と昼食買ってから別れて、二二二、二時間ほど会ってないよ。もしかして?」

「違う違う。私は2人に言いに来たのよ。あまり騒がないようにって！目立つと関係疑われるの困るもの。余計な仕事増やしたくないし」
「OK。分かった。ゲイルに会ったら伝えとく。恋人ルルちゃんによるしくね〜」

シャーリーはロメインの冷やかに顔を真っ赤にして、ロメインはシャーリーから逃げた。

ロメイんと別れた後も、ゲイルとはなぜか会えず、ジノとアーニャばかり目にする。アナウンスの鐘が鳴り、ミレイが巨大ピザのイベントの時間を知らせる。シャーリーは仕方なく、リヴァルたちのいる巨大ピザ作りのイベント会場へ戻っていくことになった。

その日の夜、スザクに呼ばれて屋上で待っていたルルーシュは、スザクから携帯である人物に出て話すように言われる。

「来週、赴任する新しいエリア11の総督だよ」

「総督？そんな偉い方と話していいのかい？俺はただの学生に……」

『あの、お兄様ですか？』

ルルーシュは受話器の中から聞こえる、妹のナナリーの声に、スザクのルルーシュに対する裏を知る。だが、ナナリーに嘘は付けない。そんな時、ロロガスザクにギアスをかけて、体感を止める。その短時間でナナリーと話し、話しの裏を合わせるように説得する。スザクを欺き、内心ホツとするルルーシュは屋上から去るのだった。

「ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア。やはり、ゼロの記憶が戻っている

ようですね」

隠し盗聴器を仕掛けていたD・Dは、シャーリーに微笑む。この盗聴器は雑音を作らず、仕掛けていても分からない形のステルス盗聴器。シャーリーに歓迎会の際に、ルルーシュの目を盗んで仕掛けておいた盗聴器だった。

「ルルーシュは、必ず妹のナナリーを助けに向かう。キャサリン殿下にお話してもいいかな、シャーリー？」

「あなたの契約に背かないなら、お話しても構いません」

D・Dは携帯の電源を切り、盗聴器の電波を遮断した。D・Dは別の携帯を取り、キャサリンに連絡を取る。

「ええ、そうです。なるほど。面白いことが起きようですね」

D・Dは携帯の電源を切った。

「まもなく、近い日に面白いことをキャサリン殿下がやるそうです。何、心配いりませんよ。起きてからのお楽しみです」

そして、そのナナリーが総督として赴任するため、本国から護衛艦に乗って向かっている頃、スザクたちナイトオブブラウンスを欺き、先にナナリーを強奪せんと黒の騎士団が先手を打って攻撃を仕掛けてきた。ゼロはギアスを使い、艦内の入り口近くの護衛隊を始末し、ナナリーの下へ向かう。

『大した腕前なこと、ルルーシュ』

ゼロは足を止め、目の前にいる女に驚く。

『なぜ、お前がいる。お前は十数年前に病で亡くなっているはず!』

キャサリンは笑う。ゼロのルルーシュは持っていた銃でキャサリンを撃つが弾が体をすり抜ける。

『無駄よ、ルルーシュ!』

キャサリンの放つ衝撃波でルルーシュは飛ばされ、銃を破壊される。ルルーシュは立ち上がり、近くの物をキャサリンに投げる。キャサリンはそれを衝撃波で別の場所へ飛ばし、

『無駄って言うてるのに、分からずやね〜』

仕方なく、ルルーシュは抵抗せずキャサリンの前に立つ。

『一つ聞く。お前は誰だ? キャサリンの遺体は俺も火葬されるのを見た。お前はキャサリンじゃないいな?』

キャサリンは溜息をつき、恐ろしい顔付きになる。その顔は、ユーフェミアを仮死させた時と同じ顔だった。

『確かに私はキャサリンじゃないわ。強いていえば、数百年前のブリタニアの女帝。私の知っている子もね、今のブリタニア帝国皇族の分家や親戚に当たるの』

キャサリンの名を語る女は、外の様子が騒がしくなってきたのを知り、姿を消そうとしていた。その前に女は言うべきことを言った。

『私はブリタニア帝国第66代女帝エメラルダ・ユン・ブリタニア。私は生まれ変わった時はもちろん、ルルーシュあなたの知るキャサリン

だったわ。でもね、病で亡くなって力を得たの。私の目的はね…』

ルルーシュは目を疑う。ルルーシュにとって今は関係ないが、ルルーシュの未来を変えるところでもない言葉の目的だった。護衛艦が崩れ始め、ナナリーどころではなくなったルルーシュは、脱出経路から飛び降りてカレンの紅蓮可翔式に助け出される。ナナリーを助けたのは駆け付けたナイトオブブラウズたちで、スザクがエナジーを大量に消費する全方位シールドを展開し、助け出すのだった。崩れていく護衛艦の中でキャサリンは消え、正体不明のまま強奪作戦は終わりを迎えた。

次回、第3話に続く…

仕掛けられた偽りの行政特区

ナナリーの総督赴任の挨拶は、日本人ならずブリタニア人にも驚きを見せていた。目の見えない幼い皇女。誰もが、ナイトオブラウンズが護衛に付く理由が分かった気がしていた。ルルーシュはナナリーを助け出せず、少し焦燥感があつたものの、ゼロの仮面を被り続けることを決意する。

そのナナリーの挨拶に入っていたのは、最も誰もが目を疑った行政特区思想の再びの発案だったのである。さらに、副総督に就任したのは、ルルーシュの思惑をことごとく破ってきたキャサリン皇女であつた。ユーフェミアの時は、コーネリアが総督の地位にいたため表立って動けなかつたが、ナイトオブラウンズの護衛だけでは完全には護衛できない時間最もあるため、副総督に立候補したのである。その副総督が就いたと分かったことで、ブリタニア人はナナリーだけでは不安だったので、安堵したような顔を見せたのである。

「ナナリー、演説素晴らしかったわ。行政特区も成功させましようね」

「はい、キャサリン姉様。ユフィ姉様の意志を継ぎたいんですー！」

「うんうん。ナナリーは偉いわ」

ーさてと。EU方面から少し中華連邦に戦争仕掛けてもらいましようかしら。本格的に世界が一つにまとまるなら、潰し合わせるのが最も目的に近づくのだからねー

キャサリンはナナリーの頭を撫でながら、そう考えていたのである。この計画の主な目的は、実際のところルルーシュとシュナイゼルの計略を潰すのが狙いであつた。ルルーシュが黒の騎士団を率い、日本人を連れて中華連邦に逃げる計画と、シュナイゼルが打つ中華連邦

の支配を潰すして引かせ、そのところでEUから戦争を仕掛ける不意打ち戦法であり、エリア11はその合間を利用して完全なるキャサリン専用の支配下に置く計画だった。

「恐ろしいお方だよ、キャサリン殿下は」

D・Dは、コーヒを一口飲みながら、シャーリーにそう話すのであった。

「行政特区は、確か百万のゼロで逃げる計画でしたよね？キャサリン殿下はどうなさる予定なのでしょうっ？」

「さあ、私にも分かりませんよ。何か策があるのは見えますがね」

世界の歴史が大きくうねりを上げて変わろうとしていた。キャサリンことエメラルダの目的は何なのか。いつしかシャーリーの心にも異変が起きるのだった。

ゼロのルルーシュは、エリア11政庁に自ら連絡を取り、ゼロの自分だけを助けるよう話を出す。ゼロをエリア11追放とすれば、エリア11の脅威はなくなる。キャサリンも同意したことにより、行政特区でのゼロの追放を宣言した後、黒の騎士団を排除する計画を立てた。キャサリンは百万のゼロを使って逃げる計画を知っているので、何も言うことはなかった。

行政特区が建設され、大勢の日本人が集まり出した。中には黒の騎士団も混じっており、百万に達する程の規模だった。それでも、ナナリーやキャサリンが虐殺皇女の二の舞を演じるのではないかと参加した日本人たちはそう思えてならなかった。

「よっこそ、日本の皆さん。私はあなた方と共にこの行政特区を形に

していきたいと思います」

ナナリーの呼びかけには誰も信じていなかった。それは、

「まず、エリア11行政特区の安全保証のため、黒の騎士団リーダーであるゼロを国外追放することが決定しています」

ナナリーの監視役兼事務官の女性アリシア・ローマイヤがそう告げる。その話が告げられた途端、

『ありがとう、ブリタニアの諸君！私は国外追放を受け入れよう！』

そう後ろの画面から写し出された映像からゼロが現れる。ゼロの言葉は、参加している日本人辺りからたくさん煙幕が放出され、スザクたちはテロかと思ったが日本人には手を出していけないことから、煙幕が収まるのを待った。煙幕が収まると、辺りにいた日本人たちはゼロで埋め尽くされていた。

『さあ、ゼロの皆さん！私たちは国外追放です！』

『俺がゼロだ〜！』

『私がゼロよ〜』

スザクたちはまんまと出し抜かれた。黒の騎士団ごと国外追放する気だと。

「ゼロ！お前はそれでいいのか？」

『なら、枢木スザク。お前も約束したらどうだ。残った日本人を必ず守ってみせるよ』

「約束しよう。だが、どうやってこのゼロたちを逃がす！」

ゼロは画面から消え、迎えの中華連邦生きの艦隊を引き連れて来た。すでに、中華連邦の星刻の要請で作戦は整っていたのだ。ゼロにとっても、中華連邦を後略することは必要であったため、黒の騎士団が必須だったのである。

同じ頃、分裂したEUの半分はキャサリンの企みにより、中華連邦の領土を手に入れるべくナイトメアを多数導入して陣取っていた。キャサリンは隙を見て空間を移動し、EUの戦闘本部に現れていた。

「黒の騎士団は日本の領土を出ました。天子の取り合いが終わった後、私の指示で戦闘開始してくださいね」

EUの幹部たちは目が赤く光っていた。心まで操られていた。キャサリンのギアスではなかった。

「来ておりましたか、エメラルダ殿下」

EUの幹部たちを操ったギアスの持ち主、EUを変えるべく立ち上がったが仲間やナイトメアを上手く集められず惨殺された運命を救われた存在で、ギアスを得てルルーシュとようにゼロの行動に近い指揮の下、下克上を果たした。名を、アルテス・ミストという。

「シュナイゼルには手こずりましたが、半分は残りました。あなたのいう通り、軍を配しましたので指示があれば即動きますー！」

「上出来よ、アルテス。まずは、あのシュナイゼルよね。手配したナイトメア届いた？」

アルテスは書類を見て、

「届きました。ナイトメア・ガイア、かなり使いやすいですね。操縦技術が新型なので慣れる少々かかりましたが」

「ブリタニアのナイトメアを応用したものだからね。大丈夫、あなたなら英雄になれるわ」

英雄という言葉に、アルテスはあまりピンとは来なかったが英雄になれる力を持っているのなら自分は英雄になりたいと思った。

中華連邦政府に着いた黒の騎士団は、日本人たちを人工島「蓬莱島」に自分たちの拠点にして移動させる。中華連邦政府のところには、シュナイゼルが手を回したブリタニア第一皇子オデュッセウス・ウ・ブリタニアと中華連邦の天子・麗華（リーファ）の婚姻の儀があることを知らされる。

エリア11では、思わぬ戦闘が各地で始まっていた。ナナリーを捕らえ、エリア11を己のものにせんと、キャサリンが動いたためクーデターも勃発した。ナイトオブブラウンスもない今、シュナイゼルの思惑も中華連邦に向いているため、もう行く手を阻む力はなくなった。日本人を全員捕らえんとするキャサリンは、シャーリーのいないエデンの騎士団を使って制裁を行っている。エデンの騎士団が出るところは、クーデターを起こして武器を持っている日本人だけである。

「やっと三分の一ね。ナナリーあなたのおかげで楽に進んでいるわ」

「どっぴしてこんなことをするのですか、キャサリン姉様！お父様が

黙っていませんよー」

「シャルルに守らせないわ。そろそろ他のエリアも蜂起させないとね」

フフフ、とキャサリンは嬉しそうに笑う。ナナリーを監視役兼事務官を担当していたアリシアは別の監獄に捕まっている。計画の邪魔されては困るのだ。

「お父様を呼び捨てにするなんて。あなた何様ですー！」

フン、とキャサリンは口を曲げ、声を変えていく。

『妾はブリタニア第66代女皇帝エメラルダ・ユン・ブリタニアじゃ。故あってお主の姉様と生まれ変わって存在しているが、シャルルの小童の計画など妾の足元に及ばん』

「エメラルダって、今のブリタニアと同じ世界を三分の一まで支配下に置いた最初の女帝だって…。嘘、お姉様がどうして…」

体を震わせるナナリーを見て、エメラルダはしゃがんでナナリーを見つめる。

『可愛いの〜、マリアンヌの亡眼の愛娘ナナリーよ』

エメラルダに頭を撫でられ、ビクビクと恐怖に怯えるナナリー。クロヴィスやユーフェミアの義母と違い、エメラルダには威厳と貴禄が殺気を増して恐怖を演出している。

『そろそろかの〜。ゼロとシュナイゼルが勝負を終わらせた頃は』

エメラルダは離れた中華連邦がある夜空を窓から見上げる。

ゼロとシュナイゼルのチェス勝負は引き分けで終わった。この勝負でシュナイゼルは、ゼロの正体がある程度見抜いた感覚でいた。ゼロはシュナイゼルより先に、天子の強奪を計画していて、その強奪計画は翌日の結婚式でゼロが現れたことで真実のものとなった。星刻とゼロの天子をめぐる攻防の始まりである。その裏で、スパイがキャサリンに情報を送り、戦争への流れを運ばせるのだった。3勢力の思惑が交差する中での、キャサリンことエメラルダの不意打ち戦争への流れだった。

― 第4話に続く ―

ブリタニア帝国滅亡と古代ブリタニア帝国再臨

一人の老化を帯びた女性が、天に両手を上げて叫んでいた。

「おお、クローノスの神よ！もう我が国はお終いじゃ。父親がお父様に国を継がせたばかりに、その弟に国を支配されてしまう。これも宿命なのじゃろうか」

老女は、ほとんど命の灯火を尽きかけていた。

「一つだけ方法があります。兄君の子どもを隠して、遠い国に逃げるのです。未来の国の復興のために」

一人の男がそう言った。老女はその子どもものいる場所を書き写し、男に与えて亡くなった。男は記された地へ赴き、廃墟と化した城へ入る。そこには、小さい赤子と抱き抱えて亡くなっている母親がいた。男はその赤子を手に抱き、遠くの国へ港を通じて渡った。十数年が経ち、立派に育ったかつての赤子だった青年は、ある小国の姫君の婿にと気に入られ、その姫君に娘の赤子を宿す。小国だったブリタニア帝国はその赤子の娘御の誕生を機に大きくなっていく。その赤子の娘御の名は、エメラルダ・ユン・ブリタニアであった。

現在、中華連邦の蓬莱島。ゼロが天子を強奪して、黒の騎士団と中華連邦軍が激突。星刻とカレンのナイトメア対決はカレンが捕らえられて緒戦は敗北。黒の騎士団浮遊戦闘艦イカルガは、天帝八十八陵に撤退。ゼロは停戦交渉を申し入れ、天子の命が危ういと伝えるが、中華連邦の大宦官たちは生死を否定。天子を殺そうと図り、ゼロの思惑によって録音された大宦官の発言が中華連邦全域に放送。人民の一斉蜂起により、大宦官の指揮は停滞。大竜胆(ターロンドン)を破壊され、乗っていた大宦官3名が死亡。シュナイゼルは撤退をせざ

るを得なくなる。

「今こそ、合衆国中華の建国の刻！」

星刻の呼び声と共に、合衆国中華へとまとまり始めた。黒の騎士団総帥ゼロも次の攻略地へ計画を移行させようとするが、その日から違和感を抱いていた。中華連邦領土が合衆国中華になるうとしている頃、キャサリンはアルテスに作成開始の合図を送る。その他にも、ブリタニア帝国内からもキャサリンの指示に従い、ナイトメアが多数ペンドラゴンへと出撃する。

ブリタニア本国内や中華、EUでも全国規模でエリア１ー斉蜂起の放送が流れ、世界は大混乱の渦に飲み込まれる。シャーリーは学園を守るため、エデンの騎士団を政庁から呼び寄せ、生徒会の仲間に、自分がエデンだと告げる。もうエリア１ーにルルーシュが戻り帰れる場所は無かった。ナイトオブブラウンス枢木スザクの帰れる居場所も。

それから一週間が経った。皇帝シャルルが支配したエリア全土は一斉蜂起で消え、ほとんどの総督の命が散った。皇帝シャルルは帝国から逃げ、神根島に向かった。

「兄さんから連絡があった。神根島の遺跡の近くで止めよ！」

「イエス、ユア マジエスティー！」

ブリタニア帝国などどうでもいいが、自分たちにも危機が迫っていることは知っていた。ブリタニア本国はもうお終いだっただ。統治支配エリア全土が陥落した今、本国にいる皇族等は関係なかった。

「来たね、シャルル。詳しいことは、中で話そう」

V・Vがそう言つと、シャルルの手を握って遺跡へ向かう。シャルルはもう迷っている時間はなかった。計画を進めなければ、必ず全てが破滅すると。

エリアー1政府の総督室に、誰かが訪ねてきた。

「どうぞ、お入りなつて」

「失礼します」

キャサリンの前に来たのは、シャーリーだった。何やら気難しい顔をしている。キャサリンは微笑んで、

「どうしたの、シャーリー？笑顔、笑顔！」

それでも、シャーリーは笑顔になれなかった。キャサリンの一連の騒動と動きにより、エリアー1全土は崩壊状態。シャーリーはナナリーが行方不明と聞かされて納得もできていない状況でもある。

「貴女も少しは勘付いているんでしょう？自分の出自のこと。ビスマルクから聞いたつて情報もあるわ」

シャーリーは勘付いているのは確かだったが、別のことも勘付いていた。それは、自分とルルーシュが引き離されたということ。もちろん、ロロや機密情報局全員も任を解かれ、ロロはギアスを封じられ、地下の監獄に放り込まれている。なぜ、シャーリーだけを捕まえずエデンの騎士団からも外し、世界をここまで混乱させたのか。シャーリーは聞きたいことが山ほどあったが、聞くのを止めにした。

「本国は、エリアー1は、ブリタニアはどうなるのですか？」

唐突に聞いたシャーリーに、そうねと呟き、キャサリンは笑う。

「蘇って生まれ変わるのよ。現皇帝シャルル・ジ・ブリタニアの帝国滅亡をきっかけにね」

シャーリーは顔色一つ変えなかったが、内心は困惑していた。ルーシュを守りたいのに、契約やキャサリンには逆らえない威圧を感じる。D・D・も見かけないし、どう動いたらいいか分からなかった。

シュナイゼルと同行したナイトオブブラウズたちは、エリア11や本国に帰ることができず、また他のナイトオブブラウズたちにも合流できず、近くの隠れ家に身を潜めていた。

「どうしたものかね、この展開は。まるで、計られたみたいだよ。私の居ぬ間にね」

「世界が大混乱。各地でジャミングが働いていて、本国との通信も思うようにいきません」

カノンは、何度も通信を起動させるが繋がらなかった。これは予期せぬ出来事の数々だった。シュナイゼルがせっかく手にしたEUの分裂した国々もクーデターで崩壊。英雄の登場でEUは新たな連合を作り始めている。

「EUの英雄アルテス・ミスト。EUのイレブンと手を組み、反旗を返したか」

シュナイゼルは長い考えにふけるのであった。

合衆国中華の領土の黒の騎士団拠点、蓬莱島では、その本部でルルーシュとC・C・は沈黙していた。

「エメラルダ。そう言ったのだな、ルルーシュ？」

「ああ。数百年前のブリタニアの女帝と名乗っていた」

C・C・は腕を組み、また沈黙する。再び口を開いたC・C・は、

「いたな、そんな女。だが、どうするつもりだ？ ナナリーを助けるせよ、今の合衆国中華では日本に向かえないぞ」

「分かっている！ 皇帝の動きは本当なのか？」

C・C・は頷く。ルルーシュは自分の新型ナイトメア履気楼にC・C・を乗せ、神根島に向かうことにした。スザクもナナリーを救うべく、シュナイゼルに許可を取り、アヴァロンでエリア1に突入する。

シャーリーは用意された専用部屋で寝ていた。シャーリーは夢にうなされ、目を覚める。最近、よく見るこの夢。あの時の夢だ。記憶を取り戻し、世界を信じられなくなった時と。

「もうすぐ、私の死んだ日なんだ。色々あって、日が経つのを感じなかったな」

シャーリーは吊るされている、エデンの服と仮面を見る。何のために、エデンになったのか。ルルーシュを助けるためではなかったのか。それが何だ、この状況は。歴史が狂い始めているではないか。シャーリーは立ち上がり、決意した。エデンの服を着て、仮面を被る。

シャーリーはこれまで調べていた仮説を立て、ある場所に行く。

「やっと見つけました。だいぶやつれていますが、大丈夫ですか？」

両手を鎖に繋がれ、抵抗したかのように、機密情報局兼アッシュフォード学園教師、ヴィレッタ・ヌウがいた。

「…シャーリーか？地下の牢屋に行け。そこに、ナナリー総督がいる。逃げる、この日本から…」

「ヴィレッタ先生！」

鉄格子越しに、シャーリーは呼びかける。この言葉を伝えるためだけに、最後の体力を残していたようだった。ヴィレッタ残して居場所を知ったのは、別の階で捕まっている口口に聞き、ここに来たのだ。

シャーリーは警備員にギアスをかけ、ナナリーのために不自由しない特別な牢屋に入る。ナナリーは顔を上げ、懐かしい足音に涙する。

「シャーリーさんですよ？良かった。無事だったんですね」

「私は助けに来たの。ナナちゃんを。ルルのために」

「お兄様の？」

シャーリーは錠を開け、ナナリーを牢屋から出し、

「ナイトメアを用意してあるわ。少し狭いけど我慢してね。安全な場所に着いたら、知っていること全て話すから。もう誰も、悲しい思いはさせたくないの」

シャーリーはナナリーを連れ、ナイトメア待機場所に走った。途中で遭った警備員にもギアスをかけていき、無事に政庁を脱出する。シャーリーは自分の専用新型ナイトメア、アテナの格納部にナナリーを詰め、車椅子を畳んで席の後ろに置く。アテナが動き出すと、外が騒がしいのに気付く。壁が破壊され、ランスロットが現れた。

「シャーリーか？ ナナリーはどこに？」

「今、格納部に入ってる！ 脱出の手助けしてスザクくん！」

スザクは頷き、シャーリーを援護しながらアヴァロンまで案内する。アヴァロン艦内では、シュナイゼルとカノン、ジノやアーニヤが全国放送を見ていた。テレビ映像には、あのキャサリンが映っていた。

『この度、全エリアが蜂起し、私の愛国ブリタニアは崩壊。同じブリタニア人のクーデターもあり、私以外の皇族はほとんど処刑されました。ここに追悼をしたいと思います』

キャサリンの行動にも何か変な感じだった。まるで内心は笑っているように思えた。シュナイゼルはスザク、ナナリー、シャーリーに気付き、近寄るよう促す。

「皇帝陛下が神根島に向かってしていると情報が入った。ゼロも向かっていらっしよ」

「僕に行かせてください！ ゼロは陛下の命を狙っています！」

ふむ、とシュナイゼルは言い、少し沈黙した。

「言いだろう。だが、少し休んでから行くがいい。色々、準備が必要だろっ」

「シュナイゼル閣下。」協力感謝します！」

スザクは自分の部屋に向かって歩いて行く。シュナイゼルはナナリーを引き寄せ、シャーリーに車椅子を押させる。

「話を聞かせてもらいたい。今のキャサリンについて全て」

ナナリーは頷く。もうキャサリンを誰も信用できずにいた。

アーニヤは自分の部屋でブログを更新していると、急に気が遠くなるのを感じた。この頃、どんどん酷くなっている。アーニヤは頭痛にやられ、頭を下げて少し気絶すると、口が笑みをして、立ち上がる。アーニヤはそのまま、スザクの部屋に向かう。

エリアー1旧政庁では、数個に区切られたマスの映像に、一人ずつ各国のリーダーが映っていた。

『予定通り、全てが上手くいきました。後はキャサリン皇女のなさりたいようにお願いします。』

『「こちらも上と同じ。キャサリン皇女のなさりたいように」』

キャサリンは微笑み、嬉しそうに両手を合わせる。彼等は全員、本来は歴史の中で暗殺されたり、処刑されて名を残せなかった人物ばかり。D・D・が不在の理由は、時空を行き来して彼等にギアスを与え、歴史を変えることだった。シャーリーにしたように。

「じゃあ、これで全部ね。みんなご苦労様。みんなの国の安全は保証

するわ。それじゃあ、始めましょうか！」

キャサリンは支度しておいた皇帝服に着替え、部屋をスイッチで作り変える。まるで、ブリタニア本国のペンドラゴンのような玉座もあつた。

『全世界の皆さんー長い間、苦しめて大変申し訳ございません。ここ日本の方々も解放し、不自由のない暮らしを提供致しました。私は皆さんに再び、お伝えしたいことがあつて全国ネットにて放映しています』

キャサリンは間を少し空け、口を開く。

『私はここに、新たな統治国家、大聖ブリタニア教国を建国することをここに誓います！ブリタニア教国は人種、血族、性別問わず、誰もが等しく生きられる正しき国となるでしょう！』

世界各国の幹部や蜂起した人民は、その言葉に賛同し、大きな歓声を上げる。悪逆女皇帝キャサリンの誕生の瞬間であつた。

ー第五話に続くー

選択の未来―仮面の二人

ゼロはある地下施設で、もう一人の仮面の女騎士と対峙していた。二人にとつて、長い時間にかけて、ようやく対峙できた道だった。どちらもブリタニア人でありながら、一方は敵で、もう一方は味方なのか不明だったからだ。

『お互い、仮面を外しましょうか？ もう隠す必要なんてないはずよ、ルル』

シャーリーはエデンの仮面を外す。ゼロは驚く。なぜ彼女がエデンだったのか。自分以上に鮮やかに欺く存在などいないはずだと確信していたのに。ゼロは仮面を外す。ルルシユの顔が現れる。

「シャーリー、どうして？ 話してくれるか？ 君の知っている全てを」

話は数日前に遡る。大聖ブリタニア教国を建国したキャサリン・グ・ブリタニアは、日本をリーダーとして指揮権を使用。合衆国日本と合衆国中華に戦争を言い渡した。ルルシユとC・Cは、神根島に着き、先にルルシユをある世界に送る。

「やっぱり、C・Cも来てたのね？」

「誰だ、お前？」

スザクと共に現れたアーニヤは、C・Cに手を触れる。アーニヤはC・Cの深層心理に入り、C・Cの心と会う。アーニヤは姿を変え、死んだはずのルルシユの母マリアンヌへと姿を変える。C・Cは納得し、

「マリアンヌ、お前だったのか。深層心理から出て先に行け。ルルーシュが待ってる」

マリアンヌは深層心理から消え、アーニヤの姿になっていた。アーニヤはC・Cの力を借り、ルルーシュの後を追った。スザクはよく分からない顔をしていた。

「行きたいか、スザク？ルルーシュの真実を？」

倒れたアーニヤをスザクは寝かせ、C・Cを見る。

「この状況だ。連れて行ってもらえるかい？」

「ああ。約束しよう。ルルーシュの知る真実を確かめ、お前の意見を聞きたい」

ルルーシュはマリアンヌが現れたことに、とても動揺していた。シャルルの見せた幻覚が何かなどと怒ったが、マリアンヌの言葉に冷静になる。

「今こそ話そう、ルルーシュ。ブリタニアの真実とマリアンヌの死について。そこを見よ」

ルルーシュは奥に倒れているV・Vを見る。既に死んでいる。シャルルがやったのか。

「わしは不死身となった。お前がギアスを使おうがわしには効かん。真実を知ってからお前の話を聞こう」

マリアンヌはシャルルの横に移動し、シャルルは口を開く。

「ブリタニアは血塗られた歴史が多い。子が多いせいか、権力争いも絶えなかった。わしの父も正しきブリタニアの皇帝だった。だが、権力争いが激しい時代だ。父を殺され、その兄さんと二人きりになったわしは、不死身となった兄さんからギアスを与えられた。わしはギアスを使い皇帝になり、兄さんは教団を組織した。わしと兄さんは力と強さを求めた。その頃だ」

シャルルはマリアンヌを見る。

「わしとマリアンヌが出会ったのは。マリアンヌはギアスの存在を知り、C・Cと共に力を付けてきた。わしはマリアンヌをラウンズに加え、監視することにした。そして、なぜかお互いに惹かれていったのだ。わしはマリアンヌを皇后に迎え、ルルーシュとナナリーお前たちが生まれた。その頃だ、兄さんが奇妙な行動を取り始めたのは」

マリアンヌは頷く。ルルーシュが知りたかった真実。遂に紐解かれる時がきた。

「マリアンヌは兄さんに呼び出され、護衛を引かせた。その日、兄さんがまさかマリアンヌを殺そうとは夢にも思わなんだ」

「私のギアスは、自身の命が尽きる時に発動するギアス。他者の深層心理を渡り、魂だけは無事に、当時行儀見習いに来ていたアーニヤの心に侵入したの」

「わしは兄さんに尋ねたが、何も語らなかった。嘘のない世界を理想にしたわしたち兄弟に亀裂が出た。わしはマリアンヌと共に、嘘のない優しい世界を実現するため、お前たちを日本の安全な場所に置くしかなかった。それしか兄さんから守るすべがなかったのだ。これが、わしとマリアンヌが知る真実の全てだ。アーカーシャの剣こそ、この場

所がもたらした嘘のない優しい世界を作る最も神に近く、神を滅ぼす場所なのだ」

ルルーシュは混乱する。

「お前たちはどう思うっ？」

スザクとC・Cは、ルルーシュに気付かれ霧の中から出てきた。

「枢木スザク。分かっていると思うが、わしは不死身だ。絶対に死なぬ。それと、お主に教えねばならぬ事がある。キャサリンに伏せるように言われたが、あやつは昔から信用できなかった」

「何をです？」

スザクはシャルルを睨む。いったい何の事を話そうというのだ。

「ユーフェミアは生きておる。キャサリンは兄さんと組み、ユーフェミアを生かしたまま仮死状態にしてルルーシュと憎しみ合わせた。全ての元凶は今キャサリンにある。それを阻止するために、C・Cの力を必要とし待っていた」

スザクだけでなく、ルルーシュも驚く。やはり死んでいなかった。キャサリン、いやエメラルダこそ、本来倒すべき相手だったのだ。

「C・Cよ、今こそアーカーシャの剣を使う時……」

その時、四人のいる世界に干渉してきた人物がいた。

『愚かな者どもよの。全ての時を受け入れればいいものを』

そこには、年配の女性がV・Vの隣に座っていた。シャルルは足を一歩引く。

「お主はエメラルダ・ユン・ブリタニアか？」

エメラルダはニタリと笑い、シャルルを睨み付ける。エメラルダは立ち上がり、

「先祖に向かって失礼な物言いよの、シャルル。まあ、お前とマリアン又はもう要らん存在だかの」

エメラルダはC・Cの力を無視し、アーカーシャの剣を稼働させる。そして、別の力がアーカーシャの剣を崩壊させる。

「なぜ、アーカーシャの剣が消える〜！」

「そんな、私たちの理想郷が！」

シャルルとマリアン又は驚き、怯える。自分たち以外は消すこととは不可能だと思っていただけに、エメラルダの力は強大であった。

「妾は見たのじゃ。全ての世界の可能性、全てのギアスの力を。もうまもなく、新たな秩序が誕生する。さあ、クロノースの盾よ、シャルルとマリアン又は消したもおうれ！」

シャルルとマリアン又は消えていく。Cの世界が崩壊を始め、アーカーシャの剣の力は完全に失われた。

「逃げるぞ、二人とも！未だに残っているこのこの世界においては、お前たちも消されるぞ！」

「ルルーシュ！突っ立ってないで、一緒に来い！」

ルルーシュは呆然としながらも、スザクに手を引かれてシャルルとマリアンヌが消えた位置を見つめている。V・Vの遺体は崩壊とともに転落して消えていく。その崩壊の中、エメラルダは高笑いし、その場から去っていく。V・Vの教団アジトも崩壊し始めた。いくつもの遺跡は音を立てて崩れ去り、世界から消滅していった。全てはエメラルダの力が崩壊をもたらしたのだった。

Cの世界から脱出し、今も呆然としているルルーシュを、スザクは平手打ちする。

「目を覚ませ、ルルーシュ！例え、ユフィが生きていようと、お前の罪は消えない。ナナリーは助けた。今はお前のやるべきことをするんだ。ゼロとしての責任を！」

「分かっている。エメラルダこそ、全ての元凶だ」

C・Cは寝ているアーニヤを肩に背負う。最後の戦いが近づいている。携帯が鳴り、スザクは電話に出る。シャーリーからの連絡だった。驚愕の報を受けたスザクは、ルルーシュに向かってほしい場所を記す。スザクはC・Cを連れて、シュナイゼルとナナリーを助けに行かねばならなくなった。ルルーシュはゼロの仮面を被り、スザクに教えられた場所、アツシュフォード学園、機密情報局の使っていた地下施設へ屋気楼で向かう。

そして、ルルーシュであるゼロは、エデンであるシャーリーと会い、現在に至る。

「話すね、ルル。まずは、エデンになった理由から」

シャーリーは一度は自分が死んでいること。未来から過去に向かい、記憶を持ったまま歴史を変え始めたこと。ルルーシュを助けるため、自分も監視の役目を得ていたこと。これまでの戦い全てを話した。

「それ、とね。ルルを好き出し、結婚したいとも思ってるし、出来るんだけど。あのね」

シャーリーは自分の出自について話す。ルルーシュはまたも驚く。全てが仕組まれているかのように、ルルーシュはシャーリーを抱きしめ、子どものように涙を流す。ルルーシュも、シャルルや母マリアンヌの死を語りながら、シャーリーを抱きしめたまま話す。シャーリーはルルーシュをなだめるように撫で、涙が収まるまで待った。とても辛かったのだろう。分かっていた。皇帝ルルーシュのなる未来だって、全てを受け止め、憎しみや悲しみを背負ったまま別のゼロに自らを討たせたのだ。苦しいわけではない。

「私ね。もう迷わない。キャサリンと戦う。私は死ぬかもしれない。でも、ルルは殺させない。ナナちゃんも。だって、そのために戻って来たんだもん、未来から」

「いいのか、それで？」

「うん。一緒に歩こうよ、この世界を。ゼロとエデンで」

シャーリーは微笑む。スザクはユフィを戦いが終わったら探すだろう。皇位継承権はないユフィと幸せに暮らせて結ばれるはずだ。あの時、殺さなくて本当に良かった。ルルーシュとシャーリーは仮面を被り、手を繋いで向かう。最強の軍団と組織、リーダー、ナイトメア。やっと揃ったのだ。大切なものを守る、エメラルダに対抗でき

る力が！

―第六話に続く―

集いし最強のナイトメア部隊と連合艦隊

世界は、とてつもない勢力図を示していた。3分の2という大半の領土が、大聖ブリタニア教国によって支配されていたのだ。悪のブリタニアは滅び、例えブリタニアを正しく建国しても、世界は否定と嫌悪を示すだろう。最後の戦いを前に、展開は思わぬ方向に流れを変えていくこととなる。

エメラルダ・ユン・ブリタニアは、キャサリンの姿をまとい、自らが治めていた古代ブリタニア帝国の跡地にいた。エメラルダは地に手を付き、何かを唱え始める。

「クロノースの神よ、アーカーシャによって封印された妾の作りし神殿を蘇らせたまえ〜！」

世界中が地響きし、神根島からも新たな遺跡が降臨する。世界各地は、神の再来と感じ祈りを捧げる。これこそ、エメラルダが待ち望んでいた本当の計画である。

時間は3日前に巻き戻る。シャルルとマリアンヌを消滅させたエメラルダはキャサリンに戻り、シュナイゼルとナナリーがいる浮遊艦アヴァロンに姿を見せる。ナイトオブブラウنزのジノが守ろうとするも、キャサリンの強打な力の前にジノは弾き飛ばされる。

「其方々にブリタニアは再興できぬ。世界はシャルルの意志を継ごうとする皇族を殺しにかかるだろうぞ」

逃げようとするシュナイゼルに、キャサリンはサイコキネシスを使い、シュナイゼルの首を締め付ける。

「やはりそうでしたか。あなたの狙いは、全皇族の継承権剥奪と抹殺。ナナリーの話で推測はできていました。まだ手はある。あなたはいずれ、必ず滅ぼされる……」

グチャリ、とキャサリンはサイコキネシスでシュナイゼルを締め殺す。ナナリーの姿がない。誰かが移動させたのか。つまり、シュナイゼルは自らを犠牲に、囷として待っていた。

「勿体無い頭脳よの。仕方ない。政庁に戻るつかの」

キャサリンは少し離れた片隅を見て、笑みを浮かべる。そうして、キャサリンは姿を消す。キャサリンが見た片隅では、暗くて狭いがシャーリーとナナリーが隠れていた。見抜かれているにも関わらず、キャサリンは手を出さなかったのだ。

「大丈夫、ナナちゃん？」

震えるナナリーの手を握る。シュナイゼルが亡くなった。ナナリーにとっても大切なお兄さんだったはずなのだ。皇族がたくさん殺されている。怖いわけがない。いつ自分が狙われるか怯えているのだ。

「どこだ、ナナリー！こ、これは？」

ジノは気絶。シュナイゼルは血を流して亡くなっていた。片隅からナナリーを連れてシャーリーが出てくる。少しは震えが止まったが、ナナリーの目に涙が零れている。駆けつけた護衛官にシュナイゼルの遺体を移動させ、ナナリーが落ち着くのを待つ。

トウキョウ租界の政庁では、地下牢獄に監禁されていたヴィレット・ヌウとロロが解放されていた。解放の助けたのはエデンの騎士団

で、シャーリーと連絡が取れないのを不信に思ったゲイルとロメインは仲間を説得。政庁を襲撃し、機密情報局のメンバー全員を救出するのだった。しかし、キャサリンとD・Dの姿はなく、政庁は物抜けの殻状態だった。

一方、学園に戻ったルルーシュは、待ち伏せていたジェレミアと接触。ショッピングモールへとギアスの効かないジェレミアから逃げるのであった。途中、出会った警官らにギアスをかけ行く手を阻ませるものの、ギアスキャンセルの力で圧倒。G列車周辺まで追い詰められる。

「V・Vは死んだ。皇帝陛下も亡くなった。しかし、私は疑問に思っていることがある。なぜ、ブリタニア皇族を、皇帝陛下を狙った？」

「くっー！」

ルルーシュはG列車のゲフィオンディスターバーを起動させる。ジェレミアの足が、体が動けなくなる。

「俺が、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアだからだ。母マリアンヌの子どもだからだー！」

ジェレミアはそうかと確信する。ようやく理解した。

「私も亡くなったマリアンヌ様の護衛に付いていました。これで思い残すことはありません。…マリアンヌ様ー！」

「俺を殺しに来たわけじゃ…」

ルルーシュはG列車の起動を止め、ジェレミアにまだ終わって

いないと語る。未来は、歴史は変わった。俺に忠義を尽くせる覚悟が残っているなら、亡きマリアンヌの代わりに忠義を尽くしてくれ、と。

ジエレミアが仲間に加わり、ヴィレッタやロロが戻って来た。けれど、その不意を狙い、またしてもキャサリンが現れる。

『もはや、其方らの好きなようにさせん！』

「そこまでだ、ブリタニアの反逆者キャサリン・グ・ブリタニア！」

コーネリアがキャサリンに剣を抜いて襲いかかる。それを逆手に取ってか、キャサリンはロロの後ろに移動し、

「ロロと共に殺せるか、コーネリア？お前が来ないのなら、妾から行くぞ？」

ロロはギアスを使い、キャサリンを一時停止させる。ロロは抜け出せない。しかし、ロロのギアスは一時停止させたかに思えたキャサリンに首を締められる。

「妾にギアスは効かんで、偽りの弟ロロ・ランペルージ」

ロロは遠くへ投げ飛ばされる。ギアスが解け、コーネリアやヴィレッタたちが気付いた時には、ロロとキャサリンは遠くにいた。ロロはギアスの負担で弱っている。何度も何度もキャサリンに投げ飛ばされ、ロロにはもう起きるだけの力も無くなっていた。キャサリンはロロを持ち上げ、首をへし折る。ゼロやヴィレッタ、コーネリアたちが追いついた時には、すでに遅かった。

「何てことを。ロロまで殺されるとは。ゼロ、ユフィからの言伝だ。あの女を倒すには、全てを中心。日本で開発され、地下奥深くに眠っ

ている天地要塞グランド・ヴレイヴを壊せ、と」

『あの女の正体、そして命の根源か！』

「ゼロ。ブリタニア軍の正規軍、いやエデンからの通信だ。カレンのことも話があるらしい」

扇の連絡により、ゼロはモニター越しにエデンと話す。

『どうしましたか、エデン？カレンのことでお話があると連絡がありましたか？』

エデンは頷き、

『そのカレンさんをお返ししたいと思います。ですが、条件があります』

『こちらのエースパイロットをお返ししてくださるのなら、条件次第で引き受けましょう』

エデンはセシルにナイトメアのデータを、黒の騎士団に転送する。

『これは勝手に改造してしまった紅蓮のデータです。ナイトメア研究担当ロイド・アスプルント大佐とセシル・クルーミー中尉がやってしまったので、少し申し訳がないと思っています。ですが、このデータを基に、より強力なナイトメア部隊を作ることができると思います、お話をもちかけました』

「勝手に改造されたのは釈だけどさあ。ゼロ、彼等のブリタニアと組めば、あのブリタニア教国にも勝てるかもよ」

ラクシャータはキセルを吹かしながら、少し興味深々にデータを
見ていた。

『引き受けましょうー我々にも強力な戦力が欲しかった』

『交渉成立です。アヴァロンにそちらの艦隊のデータをお送りください。ブリタニア教国に反抗する艦隊にも援軍を要請致します。ゼロ、最後の戦いは近づいています』

エデンの申し出を受けたゼロは、超合衆国連合に神聖ブリタニアが加わることを示し、世界と運命を賭けた最後の戦いの準備を急がせる。帰って来たカレンに、黒の騎士団幹部は皆喜び、アヴァロンからも紅蓮聖天八極式が渡された。ジェレミアは亡きV・V・が残したジークフリートを戦力に加え、星刻の神虎（シェン・フー）など続々と戦力が整えられていった。ブリタニア軍は、スザクやC・C・のランロットの新型機の開発を急ぎ、ゼロにシュナイゼルが使う予定だった天空要塞ダモクレスの位置を教える。

キャサリンは黒の騎士団や旧ブリタニア軍が手を組んだのを知り、最終決戦に備えて各国に戦力を整えるよう促す。

「ダモクレスが奴等の最終切り札かもしれないのう。妾の天地要塞グラウンド・ヴレイヴに対抗しようと言っ腹と見える」

後ろで、D・D・は笑っている。

「まったく、妾もゼロも、あのシャーリーが運命のキングとは知らなかったぞ、D・D・？」

「それはそうでしょう。ゲイルやロメインには効きますが、ヴレイヴ

の力はシャーリーには使えません。もし、シャーリーが自分の価値に気づいたら、あなたの負けですから」

D・Dはコーヒーを一口飲み、キャサリンに微笑む。未だに敵が味方がキャサリンにも分からずにいた。

「お主はどちらの味方じゃ？復活しておる裏切り者どもは健在しておるし、妾と其方の計画をわざわざ破滅させる気か？」

D・Dはコップを皿に置き、

「C・Cが捕らわれ、世界から消滅できるならあなたの勝ち。だが、グランド・ヴレイヴが破壊されるのなら、シャーリーの勝ち。どちらも、私の契約を果たせる存在。今はどちらの味方でもありませんよ」

D・Dはコップを手に取り、コーヒーを少しずつ飲む。キャサリンは不満そうだが、勝つためにここまで来た。世界が誰の手に渡るかによって、D・Dがどちらかの味方をする。D・Dもまた世界の命運を握る一人なのだろう。

― 第7話に続く ―

ナイトオブブラウンス消滅―分割された世界

キャサリン、いやエメラルダ・ユン・ブリタニアによって神聖ブリタニア帝国は滅亡。ペンドラゴンにいた皇族らも処刑され、ユーフェミアは継承権剥奪、シュナイゼルは殺された。世界はまさに、エメラルダ・ユン・ブリタニアが建国した大聖ブリタニア教国によって大きく塗り替えられ始めていたのだ。それに対し、ゼロの黒の騎士団、神聖ブリタニア帝国軍、エデンの騎士団を始めとした勢力が結集。合衆国連合に加わったブリタニア教国に異議を唱える各国も参加し、世界の命運を握る一大勢力となっていた。

「ヴァルトシュタイン卿、準備がこちらは整いましたよ」

ナイトオブナイン、ノネット・エニアグラム卿がビスマルクにそう伝える。

「こちららも準備OKだ、シュタイン卿」

ナイトオブテン、ルキアーノ・ブラッドリーが言う。

「モニカ・クルシェフスキー、準備整いました」

ナイトオブトゥエルブが話す。

「こちららも準備整ったよー!」

ナイトオブフォー、ドロテア・エルンストが伝える。残る数名のナイトオブブラウンスも同意する。ここにいないのは、ナイトオブスリーのジノ・ヴァインベルグ、ナイトオブシックスのアーニャ・アールストレイム、ナイトオブセブンの枢木スザクであった。彼等の話で

は、反抗する他のブリタニア帝国軍勢力をまとめ、合衆国連合と手を組んで戦うという話になったらしい。しかし、こちらもナイトオブブラウズが九名、そのナイトオブブラウズ率いる軍隊数百のナイトメア部隊と艦隊がある。

「三人のナイトオブブラウズ無くとも、簡単に倒されはせん。ブリタニアの反逆者キャサリン・グ・ブリタニアを倒し、皇帝陛下や亡くなられた皇族方の仇を討つのだ！」

オールハイル・ブリタニア、とナイトオブブラウズ九名が叫ぶ。ナイトオブブラウズが総出撃した動きを聞き、キャサリンは笑う。

「来たか、シャルルの残し部隊が。我が、最強部隊ナイトマスターズを出撃させよ！己の非力さを知らないナイトオブブラウズに見せつけるが良いわ」

ブリタニア教国軍勢力から、数百の艦隊と、その艦隊から出る数千のナイトメア部隊。その艦隊の主であるナイトマスターズ部隊が先頭に立ち、ナイトオブブラウズ勢力に立ち塞がる。

『これはこれは、ナイトオブワン、ビスマルク・ヴァルトシュタイン卿の』

ナイトメア・グリフォンを操る男が画面に語る。ビスマルクはよく顔を確かめる。

「貴様は、キャサリンの騎士だった男か？」

『ええ、そうですよ。今はマスターズワンの地位にいます。実際のところ、我々ナイトマスターズだけでも、あなた方の勢力を壊滅できるだけの力はあるんです。我々は後ろに下がって、高みの見物していま

すので、大勢力と遊んでやってくださいよ』

ナイトマスターズは防御シールドを張り、戦場を後退していく。まるで、手加減するからかかって来いと言わんばかりの挑発だった。

「全軍、一斉射撃！」

ナイトオブブラウンズの命令で、ラウンズ勢力からたくさんの弾がブリタニア教国軍に向かって飛んでいく。それでも、ブリタニア教国は不意打ちとばかりに特殊シールドを展開し、ナイトメア部隊や艦隊を守る。

『言い忘れていましたが、直接攻撃しない限り何万発撃っても減りませんよ、こちらは』

グリフォンを操る男、フォルメン・ガーゴイルは、高笑いしてさらに挑発してくる。

「全軍、敵勢力に向けて出撃！大差ではあるが、勝ち目はある！」

ナイトオブワンも戦いを仕掛け、たくさんのナイトメア部隊が交戦する。艦隊同士の戦闘もあり、互いの勢力が戦力を削り合う。特殊防御シールドが時々張り巡る中、ラウンズ勢力の艦隊が数を減らし、ラウンズ勢力は次第に劣勢へと向かっていく。

『だいぶ遊んでもらいましたので、そろそろ我々も戦いましょう。その前に』

どこかから、巨大な弾頭が一つラウンズ艦隊のほうに飛んでいく。弾頭が爆発し、ラウンズ艦隊は全滅した。ニーナの作ったフレイヤ弾頭に近い破壊力を持っている。

『「こちらもお返しに、一斉射撃開始〜！」』

何万発もの弾がラウンズ勢力に襲いかかる。ラウンズたちはどうにか回避するも、ラウンズ勢力のナイトメア部隊は消滅。ラウンズ九名だけが残っていた。そこに、ナイトマスターズ部隊が出てくる。

「始めからこれが狙いか、ガーゴイル！」

『その通りです。雑魚勢力など、我々が相手にしても面白くない。だったら、ラウンズ様たちを仕留めほうが何万倍も面白いでしょう？』

ナイトオブワンとマスターズワンが光速で交戦していく。ラウンズたち八名もナイトマスターズと交戦。改めてラウンズたちは、この場にはいない三人のラウンズの力が居たらどれだけ頼りになったか確信した。次々と破壊されていく互いのナイトメア。されど、ラウンズが少し劣っていた。数もあるが、マスターズの新型機の性能が遙かに優っていたのだ。

『もう終わりですか、ヴァルトシュタイン卿？目の奥のギアス、使ってもよろしいのですよ？私の力を認めたのであればね』

「致し方ない。ギアスの封印を解く。お前の負けだな」

ビスマルクは目のピアスを外し、未来を読むギアスを発動させる。だが、いくら見ても軌道が読めずにいた。ナイトマスターズ以外の軌道は全て読めるのに対して。

『読めないんですか？やはり、捨て駒のV・Vから与えられたギア

ス。私のギアスはね半径10キロ圏内のギアスを無効果するギアス
でしてね。いわば、私がいる限り、誰のギアスも発動しても使えない
状態なんですよー!』

それと共に、グリフォンの素早い攻撃がビスマルクのギャラ
ハッドに向かってくる。ギャラハッドは爪の形をしたレイピアに貫
かれ、ビスマルクと沈む。他のラウンズも敗れ、ナイトマスターズは
エース級七名を残し、六名は戦死。大差を付けて、ラウンズ勢力は消
滅した。

『ご覧になりましたでしょうか、世界の皆様。この部隊こそ、私の崇
高なる戦士たち。反抗を止め、投降して下れば慈悲を尊重し、殺すよ
うなことはしません』

圧巻だった。ラウンズがいとも容易く敗れ、ブリタニア教国の鉄
壁の盾とも云える特殊防御シールド。それと、あの弾頭は天地要塞グ
ランド・ヴレイヴから放たれたものだろう。世界はまさに、正義の黒
と悪の白に定まった。ゼロは預かった天空要塞ダモクレスの起動ス
イッチを押し、天空に舞い上がる。二つの巨大要塞が片方は合衆国連
合、もう片方はブリタニア教国の中に突き出た。

『今(いま)』

「ブリタニア教国と」

『合衆国連合』

「世界の命運を賭けた戦争を」

『我々は受けて立つ!』

合衆国連合とブリタニア教国。二つの勢力が互いに名乗りを挙げた。

ルルーシュは、スザクの新型機ランスロット・アルビオンを見ていた。隣には、C・Cの新型機ランスロット・フロンティアがある。

「ここにいたのか、ルルーシュ」

「スザクか」

ブリタニア教国の戦いと戦争の旗を挙げて、2日が経っていた。スザクはコーネリアからユーフェミアの居場所を教えられるが、今はいけないと話す。残された道は一つになってしまったのだから。

「君の考えたゼロレクイエム。失敗に終わったな」

「歴史は変わった。互いの勢力が話しを持ちかける手段を持った。後は、どちらか倒れ、その存在が標的になる。つまり、どちらが勝っても、負けたほうが悪とされるのだ」

皮肉だろ、とルルーシュは笑う。もう昔のブリタニアはなく、戦争を続けている国もない。巨大な勢力圏に固められた世界は、最後の選択を迫られている。

また一人、この場に歩いて来た人物がいた。エデンは仮面を外し、ルルーシュとスザクに微笑む。カレンは後ろから現れて、シャーリーがエデンとして驚く。

「何かこうしていると、生徒会にいるのと変わらないね」

「確かに」

スザクとシャーリーがそう言うと、自然に場が和む。C・Cが入って来て、その雰囲気を見て溜息を付く。

「呑気なものだな、お前たち。ルルーシュ、扇が呼んでいる。シャーリー、お前をロイドが呼んでいるぞ、お前の新型機についてだ。カレンとスザクはナイトメアの点検でもしてろ」

「うら、C・C：あんた仕切るんじゃないわよ、ったく〜！」

ルルーシュとシャーリーは別々に分かれ、スザクとカレンは自分のナイトメアの点検を見る。まもなく、世界の各場所で戦闘が始まる合図が起きる。主力戦闘部隊である自分たちは、ダモクレスを盾に戦いを挑む。ブリタニア教国はもちろん、グランド・グレイヴを盾に挑んでくる。この戦い、どちらかの要塞が生き残るかで勝負が決まる。つまり、指揮権を持つルルーシュとキャサリンの一手一手が鍵を握る。

「要塞一つなら、乗っ取ることで勝敗が決まるが、長くなりそうだなこの戦い」

C・Cは大空を見上げる。

「果たして、どちらの頭が勝つか。私の問いも、それで決まる」

D・Dも空と地を支配している二つの要塞を見上げる。始まるのだ、互いに消し合う戦争という名の運命が。

― 第八話に続く ―

世界を賭けた戦いー前半グラント・グレイヴの力

天地要塞グラント・グレイヴに、ブリタニア教国軍勢力が再び陣を構えつつ合った。一方、ダモクレス要塞でも、超合衆国連合の黒の騎士団、合衆国中華、ブリタニア帝国軍、エデンの騎士団など教国と反する勢力が続々と合流していく。主に、ここは主力部隊が展開しており、その他の主戦以外の場所は、戦いが終わり次第優先的にその領土を一時的に支配できるようになっている。

「さて、ルルはどう指示を出すのかな。ま、私はエデンとして戦うだけだけどね」

シャーリーは新型機アテナを動かし、天空へと舞い上がる。エデンの騎士団もシャーリーに続き、空へと上昇していく。

『今まさに、キャサリン・グ・ブリタニアとの決戦が始まる。フォーメーションデルタに展開し、両翼の陣を敷け！』

超合衆国連合を含めた軍隊が、ルルーシュ、いやゼロの指示を受け、翼のように広がっていく。

「ゼロに負けるでない。防御の陣を張り、一斉攻撃に備えよ！」

エメラルダの指示で、ブリタニア教国勢力は防御シールドの内側に入り、グラント・グレイヴのシールド圏内に場を固める。

「攻撃せず、こちらの戦力だけを削ぐつもりか」

ルルーシュはゼロの仮面を外し、その場に置く。広大な海を挟んでの戦い。それでも、グラント・グレイヴの力は日本まで影響し、主

戦力を展開しているキャサリンのブリタニア教国軍の戦力は強大だった。

「これでは、ダモクレスのフレイヤも撃てん。シールドを突破するにせよ、ダモクレスの防御シールドだけでは守り切れない。仕方ない、まずは日本の政庁を落とす！」

ゼロの指示が日本の解放へ展開されることで、グラント・ヴレイヴの防御シールド圏内を少しずつ縮めて、日本の上陸に乗り出すエメラルダ。巨大であるが故に速度は遅いものの、範囲は大きいので数時間もかからない。グラント・ヴレイヴの動きによって海の波が広く揺れ、津波まで発生した。沿岸部隊は後退し、波が引くまで待つ。

「ヴレイヴを動かしてまで、このダモクレスを落とす気か！ならば、先に日本を取り戻すまでだ！」

ナイトメア同士がぶつかり合う。銃撃戦がシールドに守られ無理ならシールド圏内に入り、ナイトメア戦に持ち込むまで。

「ツインブレード装備完了！いつけー！」

シャーリーのアテナが振るMVSのツインブレード型が周りのナイトメアを蹴散らしていく。ランスロット・アルビオンの光速攻撃も、銃撃を主とするナイトメアには対して当たらず、斬られていく。カレンの紅蓮聖天八極式の近接戦闘技である輻射波動も、全体に降り注げばナイトメアは一時停止に追い込まれ、紅蓮に瞬殺される。

「ここで、第九世代ナイトメアの性能が戦局を動かしたか。にしても、シャーリーは強いのが。あの子だけは生かして捕らえなければのう」

エメラルダは要塞が破壊された時用のナイトスナイカーを用

意していた。これこそ、要塞に封じていたエメラルダの魂の心臓。フレイヤ弾頭だろつとこのナイトスナイカーは消えない。銃撃戦でも強硬な鎧で守り、弾を通さない。剣に対しては強力な盾クロノースを用意してある。

「シャーリー・フェネットだけは捕らえねば。雑魚はいくらでもくれてやるわいのつ」

エメラルダは椅子から戦場を眺めていた。

天地要塞グランド・ヴレイヴは刻一刻と日本政庁に近づいている。ブリタニア教国圏内は別の部隊に任せているのだろつ。エメラルダは政庁に居ながら、グランド・ヴレイヴを動かし、強い勢力を従えている。

『超合衆国連合の主力部隊は政庁を中心にキャサリンを捕らえろ！奴が逃げれば、この日本ごと消されるぞ！』

ゼロの忠告通り、キャサリンは消える力を持っている。消えるというよりは移動と云ったほうが正しい。今のエメラルダは政庁に居て、主力部隊を要塞に回している。日本政庁の健在している部隊と今の交戦中だが、恐らく日本政庁は陥落すると見た。

『妾の政庁勢力が手こずるとはのつ。ゼロよ、やるではないかえ』

『キャサリンか！』

キャサリンの姿をしたエメラルダは、ドス黒い通常より三倍のナイトスナイカーで政庁から出て来た。

「何なの、あのデカイ機体は？」

カレンは操縦席でナイトスナイカーを見て驚いた。カレンだけではない。ブリタニア教国と戦っている超合衆国連合の主力部隊全てが唾然としていた。

『「これこそ妾の心臓。そして…」』

ナイトスナイカーは天地要塞に向かい、シールドを解いた穴に入る。完全に要塞に入ったエメラルダは、ナイトスナイカーから降り、エレベーターを使って要塞中心部に座る。ナイトスナイカーを巨大エスカレーターで移動させ、エメラルダの下の階に位置する駆動部分にナイトスナイカーを装着。

『ただの巨大な要塞と思ったら、お前たちの負けじゃ』

ナイトスナイカーの目が光り、サクラダイドと同等のエネルギー、プレストが回転し始める。天地要塞は異形の動きを見せ、形を変形させていく。その姿はまるで、巨大なナイトメアだった。これほどまでに大きなナイトメアは見たことがない。巨大ナイトメアのグランド・ヴレイヴは政庁周辺に降り、何万発ものミサイル砲を発射する。ルルーシュはフレイヤ弾頭を撃ち、その爆発でグランド・ヴレイヴのミサイル砲全てを打ち消す。

「もはや、戦争ではないな。どちらの砲台そのもの虐殺に近い力だ」

コーネリアは空を見上げながら、そう語る。

グランド・ヴレイヴは天空要塞ダモクレスに近づきながら、周りの超合衆国連合ナイトメア部隊を破壊していく。強過ぎる巨大ナイトメアを恐れ、地上に降りよつとしたナイトメアは即座に政庁周辺の敵ナイトメアによって銃撃される。

「脱出の準備も必要だが、あの巨大ナイトメアだけは破壊しなければ
」

ルルーシユはスザクとカレン、シャーリーに極秘回線を繋ぎ、エ
メラルダを巨大ナイトメアから引きずり出すよう指示する。カレン
は紅蓮聖天八極式のドリルハンドを使い、直接内部へ侵入する。スザ
クはランスロット・アルビオンの剣を使い強行突破で駆動部分に入り
込む。シャーリーは二人を援護しつつ、ミサイル砲台をいくつも破壊
しその中へ向かう。エデンの騎士団ナンバーツー、スリーのゲイルと
ロメインもシャーリーの後に続いて入り、ナイトメアが自由自在に動
けるほどのスペース通路に出る。構造はダモクレス内部と似ている
が、幅広さはこの要塞を作るにあたってかなり広がった。スザクのと
ころにもアーニャとジノが出向き、合計で七機のナイトメアが要塞に
突入した。

『お待ちしていました、エデンの方々』

ガーゴイルが待ち焦がれていたかのように現れる。ガーゴイル
は別の仲間ナイトメアを二機連れている。

『シャーリー・フェネット！私と貴女がどちらが選ばれし存在か試さ
せてもらおう！』

「望むところです。私だって…」

シャーリーは出自を口走る。ナイトメア・アテナを動かし、ガー
ゴイルのグリフォンと相対する。

『待ってたわ、枢木卿。あたしメサイヤ・ゴーネ。ガーゴイルと並ぶ三
巨頭の一人よ』

メサイヤはナイトメア・ガルーダを起動。アルビオンとぶつかる。ジノとアーニヤもメサイヤの仲間ナイトメアと戦うことになった。

『待っていたぜよ、紅月カレン。わいは坂本吉之助っちゅう名じゃ。わいのナイトメア・フログゼノンで破壊したる！』

「同じ日本だとわね。どうしてエメラルダの仲間なの？」

『契約じゃわい、仕方ないのう。そいじゃけん、あんたには死んで貰わんいかん』

カレンは息を吸い込み、

「私も守りたいものがあるの。ここで死ぬわけにはいかないのよ」

カレンと吉之助のナイトメアが同じ日本製に近いナイトメア同士で激突する。ナイトメア・フログゼノンは吉之助の体と似て図体がデカイ。速さと技でカレンは勝負に出る。

星刻の神虎シエン・フーと藤堂のナイトメア・斬月も、残る二機のナイトメアと相對していた。このために生き残ったかのようにナイトマスターズ九機のナイトメアと人数は、グランド・ヴレイヴの守護するかのようになり立ち塞がる。グランド・ヴレイヴの片腕が天空要塞ダモクレスのシールドを自力で破り、片腕破壊を覚悟の上でダモクレス内部に入った。

「くっ！何て破壊力だ、あのナイトメア。エメラルダめ〜！」

相打ちする気があるような戦法にルルーシュはダモクレスを捨

てる決意をする。予備の屋気楼だ。エメラルダはやはりナイトスネイカーに乗る準備をしていた。お互いに要塞を破壊し捨てる覚悟でいたらしい。

「まだ落とさせん。この要塞内部で戦闘が起きているからのつ」

要塞同士がめり込んだまま、お互いの指揮官は離脱準備をし、片方の要塞では幾つもの激しい戦闘が継続中であった。

シャーリーとガーゴイルはお互いの軌道を読みながら、戦っていた。

『素晴らしい、シャーリー・フェネット！これが第九世代ナイトメアの神たるアテナの名を持つナイトメアの力！』

シャーリーはアテナの武器でガーゴイルのグリフォンの片腕を破壊する。続いてもう片方の腕も破壊し、戦闘不能まで追い込まれたグリフォンは、アテナのツインソードで両足を切断され、ガーゴイルの外に弾き出された。シャーリーはガーゴイルに飛び乗り、片目を押さえてエデンの剣を抜き、ガーゴイルを刺す。ガーゴイルは血を吐いて倒れ、全てのギアス能力者にギアスが戻る。ロメインとゲイルもギアスを発動し、瞬時に敵ナイトメアを撃破する。

『戦争は簡単には無くならない。後悔するわ、エメラルダ様の力を！』

ギアスを発動して苦戦したナイトオブブラウンズたちも、第九世代ナイトメアのランスロット・アルビオンの力の前では敵わなかった。ジノとアーニヤも敵ナイトメアを撃破し、ナイトマスターズも敵わなかったようである。

『流石じゃ、紅月カレン。お主たちに託すとしよう、この先の未来をの』

『じ』

「じゃあ、ねー!」

カレンの紅蓮聖天八極式の輻射波動がフログゼノンを破壊する。要塞内部が崩れ始め、ルルーシユは天空要塞ダモクレスを動かして海に出る。地上に落ちては意味がない。星刻の神虎シエン・フーと藤堂の斬月も敵ナイトメアを撃破し、ダモクレスに近づいている残存敵勢力を破壊に乗り出す。

「そろそろ、潮期かのう」

『要塞同士は既に破壊され始めた。ここからが最後の戦いだ。キャサリンを倒し、世界の平和を確立せよ!』

了解!と超合衆国連合全てが頷く。ルルーシユは屢気楼出るダモクレスを脱出。同じく、エメラルダも脱出してナイトスナイカーで現れる。

― 第九話に続く ―

世界を賭けた戦いー後半ーエメラルダを捕らえる

ダモクレスとグラント・グレイヴの巨大要塞同士はお互いを破壊し続け海に向かって沈んでいく。キャサリンはナイトスネイカーの攻撃で、用済みの巨大要塞を破壊して加速させていく。

『まさか妾の要塞を破壊するとはのう。まあ、半分は要塞に忍び込まれたことで自爆させようと思つて突っ込んだのは本当だかの』

ナイトスネイカーは周りの騎士団機を破壊し、ルルーシュ目掛けて攻撃してくる。カレンとスザクはエメラルダの前に立ち塞がり、厩気楼を守る。

『お主たちが守つても時間の問題よのう』

「それでも、ゼロは私が守ってみせる！」

「ゼロはこの世界になくてはならない存在だ」

カレンとスザクは武器を構え、一対一で戦う。それでも、ナイトスネイカーが互角に戦う強さは恐るべきものだった。大きさもそうだが、起動力は素早く蛇のように回避してくる。九世代や防御力の高いナイトメアでなければ簡単に破壊されているところだ。

「くっ！」

「強い！」

まだまだエナジーファイラーに余裕はあるが、変則的な技ばかり使ってくるナイトスネイカーはカレンとスザクを圧倒していた。カ

レンはクロノースの盾を破壊することに専念し、スザクは変則的な攻撃をする尻尾を破壊しようと集中する。

『思ったより戦えるのう。しかし妾を倒せると思つのは傲慢じゃ』

ナイトスナイカーは蛇の尻尾を二つに分解し、スザクのランスロット・アルビオンの腕を掴み巻き上げる。カレンが応戦して一つの尻尾を破壊したおかげでランスロットは抜け出すことができたが強さが異常だった。尻尾の半分が消えたことで起動力が落ちた。ランスロットはもう一つの尻尾も破壊し、カレンは盾を手から切り離す。

『ええい、どいつもこいつもつうつうしいー』

起動力がほとんど無くなったナイトスナイカーは、ルルーシユの屋気楼からの攻撃を受け、大きさが半分になって落ちていく。ここまできかとエメラルダは思考エレベータを稼働させ、時の流れを遅くする。エメラルダはナイトスナイカーから脱出し、近くの島へ落ちる。時の流れが戻り、ナイトスナイカーは完膚なきまでに破壊された。エメラルダが居ないことに気付いたのはその時だった。

「ここまで来れば、誰も追ってきかせんじやろつ」

エメラルダは疲れ果て、ギアスの紋章マークの近くへ座る。

「ここまです。エメラルダさんー」

逃げ道に絶つたのはシャーリーだった。エメラルダは笑い、観念したように手を挙げる。

「負けを認めよう、シャーリー・フェネット。お主の力があれば、妾を消すことなど造作もない。もうじき、兵たちが妾を捕まえに来るじゃ

ろう。少し話さんかえ、もう何もせん。ここに座ってくれ」

間も無く、エメラルダは兵たちが来て連れて行かれる。その直後、エメラルダは微笑み、シャーリーにこう言った。

「妾をこの世から消すことができるのは其方のみじゃ。其方がいつ妾を消しに来るか待っており。その時まで大人しく捕まっておるわい。あの者に宜しくな」

エメラルダは死なない。クロノースの盾も未だに健在していた。シャーリーはエメラルダと先程話したことを誰にも言うつもりはなかった。再びエメラルダに会う時まで。

「契約は替わりました。私はC・C・を殺すことはできず、野放しにした。ですが、その代わり、貴女はエメラルダを消してください。彼女が望んだ未来を」

D・Dはニコリと笑う。

「今は貴女の成すべきことをしなさい。シャーリー・フェネット。エメラルダの心臓であるナイトスナイカーは破壊された。彼女には残っている力は不死の力だけ。その魂は貴女の……」

D・Dはシャーリーに語る。シャーリーも知っていた。

「彼女は裁判にも処刑にも使えない。肉体はキャサリンを得ても、魂は不死。キャサリンの肉体を集合無意識に消してもまた転生する。貴女だけなのです」

D・Dは手を振り、その時まで姿を去っていった。

D・Dはエメラルダの牢獄を訪ねる。エメラルダは来ることを知っていたかのように鉄格子の前に引き寄せる。

「ようやく夢が叶たわい。お主も大変よのう。あれから数百年も経つと云つのに」

「最後の仕上げです。昔話でもしませぬか？あの時から全てが始まったのですから」

エメラルダとD・Dは遠く彼方を見る。数百年前からあまり変わらぬ青空。それでも時は流れている。歴史を変えたところで歴史の流れは止められない。

―数百年前―ブリタニア離宮―

もうすぐ亡くなりそうな母親は、男に赤子の女を渡す。男の手には、ギアスの紋章らしきマークがあった。男は赤子を抱きかかえ、当時のブリタニア正規軍から逃げる。男は死なない。不死の力を得ていた。それでも赤子に当たれば赤子は死ぬ。必死になって赤子を守り、男はある町に着く。男は空腹で倒れ、通りかかった町人に救われ、赤子と共に民家に住む。赤子はみるみる成長し、絶世の美女へと変貌を遂げる。男は当時見習いの青年にギアスを与え、時を待つ。

「お迎えに参りました、エメラルダ様」

民家などを支配する領土の国の王は、町で働いているエメラルダを見初め、王子の嫁にと民家の主に告げる。家主は喜び、エメラルダも家主を幸せにできるならと嫁に行く覚悟をする。

「僕も必ず騎士になります、エメラルダ姐さん。この命にかえて守ります―」

デルタリスは頷く。この世界では初めてギアスを得た少年。それがデルタリスであった。少年デルタリスはギアスと体質を活かし、王女になったエメラルダの騎士になる。だが、世界は未だ多くの戦火があり、隣国であるガリア、ローラン、アメリカ州、イギリス領など敵国ばかりであった。

「ずっとこの調子ね、デルタ」

「戦の絶えない時代ですからね」

戦で王は死に、夫である王子が即位するには時間は掛からなかった。それでも戦に怯えるこの国カロンは弱小国の一つであった。

「彼はどうしてるの？」

「今も民家にいるようで、家主の後を継いで家主になったそうです」

あの家主も殺されてしまったか。戦の終わらぬ時代。各地で戦が起き、たくさんのお体が安置される。多くの町や村が焼かれ、身元の分からない遺体も多い。カロンが滅亡するのはそのすぐだった。王に即位した王子は城に攻め込まれた敵国兵に刺され、そのまま帰らぬ人に。絶世の美女だったエメラルダは捕らえられ、敵国に渡り、数年もの間に各国を転々と戦で移動する。中でも、ブリタニアと云う国は弱小国でありながら、エメラルダの中で戦上手だった。

「男は亡くなりました。僕にこの力を与えて」

当時ブリタニア皇帝だった男の嫁になり、エメラルダはデルタリスを探す。見つけた時には男は亡くなり、デルタリスがそう語った。デルタがコードを手に入れ、エメラルダがギアスを手にしたのは

早かった。皇帝は病に伏せ、実質政権を握ったエメラルダは、兵たちを招集。力の強い兵たちにデルタからギアスを与えて、この頃からブリタニアは勢いを付ける。

しかし、ブリタニア帝国はやがて危機に晒される。ギアスだけでは太刀打ちできず、領土に支配した国々は民の蜂起により支配から解かれ、ブリタニア帝国は領土を失い他国に攻められる。エメラルダとデルタは城から逃げ、遠い異国で過ごす。それでも、戦の終わらぬ時代。エメラルダは不死のデルタと違い、戦に巻き込まれ矢や鉄砲などの傷で病に侵される。

「妾はもう駄目じゃ、デルタ。お主は生き延び、お主を終わらせる存在を見つけてるのじゃ」

「お気を確かに」

その後、エメラルダは死ぬ。長いエメラルダの人生は終わった。デルタは一人になり、クロノースの盾の存在を知ったのは数十年経った後だった。それから数百年が経ち、あんなに緊迫していたブリタニア帝国は皇帝シャルルの存在が世界を圧倒する。ギアスを使い、ナイトメアを生み出し、世界に恐怖を与えていく。そんな時、運命のいたずらか、デルタを知るはずのないブリタニア皇女が名を呼ぶ。

「久しぶりじゃのう、デルタ」

前世の記憶を持った皇女キャサリンはエメラルダそのものであった。彼女はギアスを再びデルタから授かり、ブリタニア皇帝から皇族全てを継承権剥奪、抹殺の計画を図る。クロノースの盾の力を使い、空間移動をできるようになったエメラルダは凄まじかった。そのある日、マリアンヌが何者かに殺害されたと聞く。けれど、エメラルダは動じず、デルタから貰った書物を見て、ブリタニア帝国に殺意を

覚える。それは、自分がブリタニアの元子孫であり皮肉にも知らぬままブリタニアに嫁ぎ、女帝となったと知ると表情が変わる。今となつてはもう遅い。しかし未来は変えられる。けれど、遅かった。ルルーシュが生きていてゼロになり、ブリタニア皇帝シャルルを殺害。ルルーシュが皇帝に就き、世界を救う戦いを始めエメラルダは身を隠す。幼女のまま死んだ歴史を残してブリタニアから去った。

「でも、お主がギアスを使えるとは思わなかったぞ？」

「あなたが転々と渡り歩いている頃、男が残した手紙にもう一つの力について書いてありましてね。この力で遠い未来を見ることしか出来なかった私は、クロノースの元の封印を解き、このギアスを強化し具現化しました」

「妾はすでに何回か死んでおる。妾もクロノースの盾の力を使った時、感じたのじゃ」

あるはずのないブリタニアの失われた一族の歴史を。

「私も驚きました。皇帝シャルルも、妾の夫も気付かなかつた。無論、妾も知らなかつた。デルタ、お主が時空と並行の世界を行き来できると知った時までには」

青空はとても澄み切り、美しかった。こんなに平和な青空は見たことがない。何度目かの歴史改変と失った多くの世界。

「ルルーシュは満足だろうて。ゼロとして生きていけるのだからのう」

「この歴史改変はシャーリーの功績です。あなたでも成し得なかつた」

そうさのう。とエメラルダは笑う。そろそろ時間が来た。エメラルダはデルタの持つ鍵で牢獄から出て、歩いてくるエデンとしてのシャーリーを見る。

「お待ちせしました、エメラルダさん。そして、D・D・さん！」

エメラルダとD・D・は微笑み、シャーリーと共にクロノースの盾の遺跡へ向かう。

ーここからは二通りの未来がありますー

ー【最終話

シャーリーのギアス】ー

とー【歴史を変えた者

シャーリー・ネイ・ブリタニア】の二つです。どちらも最初は同じですが、途中からは二通りのまるで違うエンディングがあります。

ネタバレになりますが、読みやすいようにお教えした方がいいと思いますので、終わり方だけお教えします。

ー【最終話シャーリーのギア

ス】では、シャーリーはルルシュと結ばれるでしょうが、ー【歴史を変えた者シャーリー・ネイ・ブリタニア】はシャーリーはブリタニアの血筋を示し、この世から消える流れを示します。ですが、シャーリーの知る全ての真実はエンディングを迎えるにあたり変わるのので、どちらを先に読みたいのかは読者の方にお任せ致します。ー最終話に続くー

最終話 シャーリーのギアス

シャーリーに連れられて、エメラルダとD・D・Dはクロノースの盾の眠る遺跡、龍乃島へ行く。エメラルダ、D・D・D、シャーリーの深い関係がある場所でもあった。

「石像があるの。シャーリー、お主のギアスでなければ通れんようじゃ」

シャーリーはギアスを発動し、石像を壊す。

「さて、妾とD・D・Dを見届けておくれ」

シャーリーはエメラルダとD・D・Dを奥の祭壇に連れていき、シャーリーは手前のギアス紋章のある場所に立つ。

「さあ、始めておくれ」

シャーリーはギアスを発動し、エメラルダとD・D・Dの手を触る。

「私の持つ本当のギアス。それはエデン。理想とされる全てのものを消滅させるギアス。かつてルルが夢見た世界を壊し、私の願う世界を作り出せたのもこのギアスのおかげ」

シャーリーに見届けられて、エメラルダとD・D・Dは消えていく。クロノースの盾も消滅していく。エメラルダとD・D・Dが消え、ゼロとC・Cが現れる。ゼロの仮面を脱ぎ、ルルーシユの顔が姿見せる。

「終わったのか、シャーリー？」

「うん。エメラルダの子孫で、失われた一族。私がそれだから。ここで、シャーリー・ネイ・ブリタニアは死んだよ、ルル」

シャーリーの目に涙が流れていた。

一ヶ月後、日本アツシュフオード学園ー。

アツシュフオード学園では、ブリタニア領土から解放された日本エリアから、離れる準備が進められていた。シャーリーはエデンとしての役目と並行して、学園地区移転を手伝っていた。ルルーシュはゼロとして、学園にはあまり姿を見せなくなった。

「世界は流れているのね。ナナリーはシュナイゼル閣下の役目を継いで宰相になったり、ユーフェミア様は生きていてスザクくんと一緒に頑張ってるし。みんな大変なのね」

ミレイはジェレミアからギアスを解かれ、単位取得した卒業後にニュースカスターを目指す道を選んだ。

リヴァルは規模の小さくなったブリタニア本国に学園地区出張が移転した後も、卒業するまではアツシュフオード学園にいたことにした。

ニーナやカレンも学園に復学する話が出ているものの、カレンは黒の騎士団、ニーナはブリタニア本国にいた。

コーネリアはブリタニアに正式に継承権を戻し、旅に出た。ギルフォードも後を追ひ、コーネリアの騎士を辞めようとはしなかった。

ナナリーはミレイの話通り、シュナイゼルの後を継ぎ宰相に就任。ブリタニア本国に助力することになる。

日本では黒の騎士団から扇要が首相の座に就き、ヴィレッタは扇を捨て切れず、扇と結婚した。玉城は長年の夢だったバーを開き、他の騎士団メンバーも日本解放の喜びに浸っていた。

ゼロは新たなブリタニア公国第1代公主ユーフェミア・リ・ブリタニアと会談。さらに、日本の首相となった扇要、合衆国中華の天子など、世界は戦争の終結とともに対話への世界になりつつあった。

エデンはゼロに代わり、エデンの騎士団を率いてエメラルダの残し残党勢力の一掃に乗り出していた。シャーリーはとって、エメラルダを消してから得た不死のコードを破棄し、普通の人間として暮らすことを決意する。

『さて、続いてのニュースです』

その間に、ミレイはアッシュフォード学園を卒業、ニユースキヤスターに就職して暮らしていた。

歴史は大きく変わったが、根本的な人々の歴史は変わることにはなかった。スザクはナナリーの護衛に就いているが、変わった点と云えばアーニヤが記憶をジェレミアから戻してもらい、ナナリーの話し相手になっていたことだった。

そして、最終決戦から七年の刻が経過した。黒の騎士団総帥ゼロが辞意を表して、姿を消した。それはもちろん、シャーリーのためだった。

ナナリーも同じく宰相の任を解かれ、ゼロやエデンの正体を知らされ、一時期は辛い顔を見せていたナナリーも、シャーリーやユーフェミアの笑顔や説得に徐々に己を取り戻し、宰相としての任を頑張り、この数年でユーフェミア公主によって解任され、ルルーシュの下に戻った。

ルルーシュもシャルルから得たコードをシャーリーから解さ
れ、普通の人間に戻り、お互いギアスを失った。それでも、ルルーシュ
もシャーリーも幸せなのだろう。ナナリーもいて、みんなのいる世界
にいるのだから。

ーシャーリーのギアス完結ー

終わりー

世界を変えた者シャーリー・ネイ・ブリタニア

エメラルダとD・Dはシャーリーに連れられ、龍乃島と名付けられた孤島に向かう。日本の孤島にしては距離があり、シャルルやマリアンヌが見つけた神根島と繋がる式根島とも違い、龍乃島は本当の孤島だった。龍乃島の遺跡は外見とは裏腹に、内部の遺跡は祭壇がしっかりしていて、ギアスの紋章がある壇上もまた真新しく見えるほどだった。

「懐かしいのう、デルタ」

「私も久方ぶりに来ました。百数十年ぶりですね」

かつてD・Dが見つけたエメラルダが最終決戦において逃げる道を作るために使った力の一部は、この龍乃島の遺跡クロノスの盾から発せられたものだった。

「さて、準備しよつかの」

エメラルダとD・Dは祭壇の奥へ立つ。シャーリーは壇上に立ち、祈りを唱えて膝を下り、両手をギアスマークに触れる。

「我、時を超えし存在を消し、同じく大威力持つクロノスの盾も消滅させることをここに誓つ」

シャーリーのギアスが発動し、龍乃島の遺跡全体にエネルギーが放出される。ギアスのエネルギーは龍乃島の波に影響を与え、世界全体にまで光の力を波打つ。

「アーカーシャの剣は消えた。そして、剣と対する盾もまた消える。シャーリーよ、お主には何度礼を申せばいいか分からぬ」

シャーリーは首を横に振る。シャーリーに涙が零れ落ちた時には、エメラルダとD・Dは消えていた。

「私はあなたの子孫で、それにシャーリー・ネイ・ブリタニアですから」

一年前。日本ブリタニア政庁。

ナイトオブブラウンズ、ビスマルク・ヴァルトシュタイン卿と対峙していたシャーリーは、

「あなたは我々でさえ知らなかった、ブリタニア皇族の分家に当たるお方であり、あなたの本当の名はシャーリー・ネイ・ブリタニア。先のブリタニア第33代皇帝エメラルダ・ユン・ブリタニア陛下の子孫なのです」

ビスマルクの話では、父親が祖先の血を引いているものの、数百年前のブリタニア帝国は隣国との激しい戦いでエメラルダは騎士と共に逃げ、亡き夫の子はメイドや執事の誰かに守られ脱出。それぞれ出会えぬまま、ブリタニア帝国は隣国に奪われかけ、援軍に駆け付けた夫の弟である次代のブリタニア皇帝が苦戦したが勝利を収め、ブリタニア帝国を立て直したという話らしい。その弟の子孫であるシャルルやルルーシュは、皇帝になるため激しい継承権争いに巻き込まれ、シャルルは父親を、ルルーシュは母マリアンヌを失う形になつたらしく、もしエメラルダが勝利を収めて戻ってきた夫の弟とブリタニアを再建し、エメラルダの子がブリタニアを継いだら、違うブリタニアとして悲惨な歴史になるであろうブリタニアを救えたかもしれないと話した。

そして、シャーリーは皇帝シャルルに会い、エデンの仮面を外す。ルルを、ゼロを監視させてください。私だけはルルの味方でいたんです」

皇帝シャルルはあまり表情を変えなかったが、

「良からう。お主の好きにせよ」

機密情報局と通じたのも、そのすぐ後だった。ヴィレッタは記憶を取り戻し、ロロをルルーシュの弟として置くことに専念。皇帝シャルルはアッシュフォード学園生徒全員にギアスをかけ、ナナリーの記憶やゼロの記憶を改変する。

やがて、ゼロの復活と共に世界は混乱と戦争の流れへ向かっていく。再びアッシュフォード学園が危機に陥らないようにシャーリーは戦いを開始する。

あれから色々となり、シャーリーはこの遺跡の中にいる。歴史は変えた。でも、シャーリーはルルーシュと一緒に暮らすことはできなかった。D・D・亡き今、もう時間がなかったのだ。シャーリーはエメラルダから授かったコードを用い、

「ルル、じゅめんね。私、これからやらないといけないことがあるの」

シャーリーはエデンの仮面を被り、ナイトメア愛機アテナに乗り、平和と安定になりつつある世界に混乱を呼び覚ます。エデンは自らをブリタニア教国の第二皇帝と名乗り、世界は再び正義と悪の終わらぬ混乱の時代へ陥っていった。仮面のゼロとエデンの、最後のコード争いの幕開けだった。

— 終わり —